

2017年の初めに

2017.01.07 守山裕次郎

昨年、世界は激動の1年であった。まず米国大統領選では当初「共和党の泡沫候補」と言われたトランプ氏が勝利し、フィリピンではこれも異色のドゥテルテ大統領が誕生、英国はEUからの離脱を決定し、韓国では朴槿恵大統領が弾劾される事態となった。

政治の世界だけでなく、社会的にも中東では自爆テロ事件が日常茶飯事となり、欧州ではフランス・ベルギーでのテロ、年末にはドイツでのトラックテロも発生し、シリアやアフリカからの難民の激増とも絡み、この流れは今後も益々激しくなるであろう。

一方で、我が国を取り巻く環境も益々厳しくなっている。尖閣諸島付近の接続水域には中国の工船が日常的に回遊、領海侵犯も頻繁に行っており、昨年の夏には数百隻の漁船団（偽装漁民団）が去来し、あわや一触即発の状況にまで至った。このような異常な状態が我が国にとり、どれほど危険なことかを何故か既存メディアはほとんど報道していない。中国の覇権主義からして、今後同様の極めて危険な状態が継続することを前提に、万一に備えて海上保安庁並びに自衛隊には、万全の体制で臨んでほしいと強く願うばかりである。

加えて中国は広い南シナ海全域を勝手に自国領と宣言し、フィリピンから国際仲裁裁判所に提訴され、中国の主張が全面否定された途端「そんな判決など紙切れに過ぎない！」と国連常任理事国とは思えない声明を出したが、まさに「ヤクザ国家」であることが証明された。だが、そんな中国が拒否権を持つ国連とは、所詮その程度の機関なのである。

この中国から隣の韓国に目を転じると、この国の国民性も、通常の神経ではとても理解できるものではない。朴槿恵大統領の言動は当初から一貫性も整合性もなかったが、そのバックに女性占い師が存在したことを、マスコミも含めて最近まで誰も問題視しなかったとは常識を超えた話である。この国では歴代大統領がその任期を終えた途端、一族郎党の数々の腐敗が暴かれ、極端には死刑まで宣告されているが、尋常な国ではあり得ない。

朝日新聞の虚報に端を発した「虚構の慰安婦問題」にいまだ固執し、一昨年末には日韓政府間で「最終的かつ不可逆的な解決」を約束し、本来必要のない10億円まで我が国が支払ったにもかかわらず、約束の日本大使館前の慰安婦像撤去はなされず、逆に先日釜山の日本総領事館前に新たな慰安婦像を設置したが、そのやり方はまるで「振り込め詐欺」と同じで、この国との約束はすべて無意味で、今後この国を相手にすべきではない。

北朝鮮の脅威を真剣に考えれば、日本との間の安全保障上の課題も多いだろうに、70年以上も前の「虚構の慰安婦問題」にこだわり続けるこの国は、まさに「ストーカー国家」との表現が適当と思うが、これもまたヘイトスピーチとして相応しくないのだろうか？

このように、海外では政治的、社会的に激動の1年間であったが、国内的には熊本での地震災害が大きかった以外、安倍政権の安定性もあり比較的平穏に推移したとも言える。

その中で特筆すべき出来事は小池都知事の就任であった。新知事の誕生は舛添前知事の「余りにもセコ過ぎる体質」が露呈したことによるが、小池氏にとって昨年の都知事選は

想定外の「棚ぼた選挙」であったことは間違いない。

それにしても、この選挙では自民党、野党双方ともに、その対応が実にお粗末であった。中でも野党は選挙戦を通じてその無責任さ、無能さを露呈したジャーナリストの鳥越氏を担いで戦ったが、その人選のお粗末さには呆れるばかりであった。結果的には小池知事の誕生がきっかけで、都庁や都議会があの大阪を遙かに凌ぐ「大伏魔殿」だったことが判明、これが最大の収穫だったかとも思われる。都議会のドンと言われる人物を中心に、最大の黒字自治体であることを隠れ蓑に、都議会が都庁とつるんでの放漫財政、やりたい放題の実態が明らかになりつつあるが、これには都民でなくとも激しい憤りを覚える。

中でも築地市場の豊洲移転に関する「盛り土問題」の無責任さは、一体全体なんと表現したら良いのであろうか？民間企業で例えれば、社長は勿論工場長も知らない(?)間に、課長以下が勝手に現場の重要箇所を設計変更し、粛々とそれを実行したということである。そして後任の社長がその事実を知り、その経緯を調査させたものの、責任の所在が明確にならないという「信じがたい巨大無責任組織」だったということである。

東京オリンピックの会場、並びにその予算問題についても、組織委員会の「老害会長」の存在とも絡み、甚だ無責任な運営がなされている感があるが、3年後に迫ったオリンピック成功のため、かつ大会後の各施設の有効利用につき、英知を集めて誰もが納得できる準備ができるよう、国民の一人として切に願うところである。

戦後70年余りが経過し、昨年5月オバマ大統領が原爆投下地である広島を訪問した。そして年末に安倍総理がハワイ真珠湾を訪問し、犠牲者の慰霊を行った。これについては前々から、広島は明らかに民間人を標的にした戦争犯罪であり、一方、真珠湾攻撃は軍部だけをターゲットにした純粹戦争行為であるとの議論があるが、そのような論議を超越し、今回の相互慰霊訪問で日米お互い過去に完全にピリオドを打ち、共に未来志向で行くとの意思表示がなされた訳で、日米双方にとって実に素晴らしい成果だったと考える。

一方で、今後も「虚構の従軍慰安婦問題」で騒ぎ続けたい韓国や、「虚構の南京大虐殺」で騒ぎ続けたい中国にとっては、実に耳にしたくないニュースだったのではなかろうか。

昨年、国内政治としては7月に参議院選挙があったが、自民党を中心とした改憲勢力が2/3を越える与党の圧勝に終わった。それにしても民主党改め、民進党となったこの政党のお粗末さには目を覆うばかりである。党が抱える問題点を本質から議論し、自分たちの考え方をまとめて国民に訴える努力もなく、対案も出さずただ与党の批判だけに終始して、それで再び政権を目指せると彼らは本当に思っているのだろうか？

党内議論を怠り、単に党名を変更して、岡田前代表のイメージが暗かったからといって選りにも選って、中身のない蓮舫氏を代表に選ぶとは、余りにも有権者を馬鹿にしているのではなかろうか。加えて、彼女は代表選前に二重国籍の疑いのあることが発覚、それについての弁明が二転三転、他人を攻撃する時の舌鋒の鋭さはなく、支離滅裂のままに終始したが、多くのマスメディアはほとんどこの事実を報道しなかった。単に戸籍謄本の写しを公開すれば済むだけのものを、彼女は何かいまだ頑なにそれには応じていない。

昨年の選挙で驚いたことは、民進党が共産党と一部の選挙区で選挙協力したことだった。人間「貧すれば鈍する」とはこのことで、目指す方向性が全く違うのに、国家国民のことなど度外視して、単なる野合によって、自分の当選だけを考える実に嘆かわしい集団だということである。(あの小沢一郎なども、全く同じ行動パターンではあるが) 次の衆議院選でも同じような野合に走るのかどうか、大いに注目すべきところである。

最後に日本のマスメディアについて考えてみたい。戦後 70 年余り経ち、いまだに韓国からは「慰安婦問題」、中国からは「南京大虐殺問題」を執拗に追求されているが、いずれも史実に反することであり、日本を貶めるためのでっち上げだったことが判明している。

元をたどれば、これら問題に火をつけたのはすべて朝日新聞であり、その偽りの記事が発端となり、しかもそれを何十年間も垂れ流し続けることで、反日に徹する韓国や中国に政治問題化され今日に至ったものであるが、その意味でこの新聞社は「万死に値する」。

事はそこの民間企業の 1 不祥事とは次元が全く異なり、我々日本人の尊厳が国際的に問われる問題なのである。先に述べた「慰安婦像」など韓国国内のみならず、米国や豪州にまで拡散させたことで、現地の日本人がイジメに遭い、あるいは肩身の狭い思いをして暮らしているそうだが、その責任を朝日新聞はどのように感じているのだろうか？

終戦直後、マッカーサーに代表される GHQ の占領政策で、優秀な日本人が二度と米国の脅威とならないよう、我が国の精神文化を含めたあらゆる分野での「日本弱体化政策」が実施され、戦争に対する贖罪意識を日本人の心に植え付けることに成功した。GHQ により僅か 10 日間ほどで作成された現憲法しかり、朝日新聞を筆頭に各マスメディアによる宣伝工作が徹底して行なわれ、それが 70 年経った今日にも強い影響を残しているのである。

それにしても朝日新聞や毎日新聞、地方紙や共同通信社、NHK を含めたマスメディアによる自虐史観は酷いものである。伝統あるこの素晴らしい日本に住み、彼らは何故に日本人の誇りを失わせ、この国を貶めようとするのか、その理由が自分には全く理解できない。

事実を報道せずに、自分たちのプロパガンダに徹するこれらの新聞や地上波テレビ等は、いずれ粛々と消えていくのだろうが、先にも述べたように尖閣諸島近海におけるきな臭さ、更には北朝鮮の脅威も迫っており、我々は別のニュースソースに頼らざるを得ない。幸い最近は U チューブ等でそれらを知ることができ、その中の 1 つで、是非お勧めしたいのは「虎ノ門ニュース 8 時入り」である。月曜日から金曜日までの 2 時間余りの番組であり、曜日替わりに個性豊かな論客が揃っており、一度是非その視聴をお勧めしたい。

閑話休題。

AI (人工知能) の近年の発達には目を見張るものがある。自動車メーカーは各社共に自動運転に向けた開発を競っており、あらゆる分野で今後急激に技術革新が進み、我々の生活スタイルも 10 年後には全く変化していることであろう。しかしながら、核爆弾の誕生のように、科学技術の発達には必ず負の側面が伴う中で、AI の急激な発達が、果たして人類に真の幸福をもたらすのだろうか?? そんなことが頭に浮かぶ年の初めである。

以上